

今日は、恩に報いると書く「報恩」についてのお話です。三年前、お檀家の高齢の女性が亡くなりました。お元気な頃ご自宅にお勤めで伺った時には、大きな声でお経を唱えてくださり、法要の後は笑顔でいろいろな話をしてくださる方でした。

葬儀はご長男が喪主を勤められ、親戚の方数名でお勤めされました。その頃はコロナワクチンの接種が始まる前のことで、残念ながら都会に住む次男さんのご家族は、帰ることができませんでした。次男さんは「夜中に行つて、母の顔を一目見たらすぐに帰るから」と強く希望されたそうですが、親戚の方がコロナ感染を心配し思い留まるよう説得しました。次男さんのお気持ちを想像すると、胸が痛くなります。私であれば、無理を通し葬儀に帰っていたかもしれません。その後次男さんの気持ちを察し、喪主さんからは、四十九日、初盆、一周忌と、法要の度に「納骨は、弟が帰ったときにさせてください」と言われました。

昨年ちょうどコロナの感染が落ち着いた時期に、次男さんのご家族も参加され三回忌をお勤めすることができました。皆さん、一生懸命お経を唱えてくださったのが印象的でした。法要の後次男さんは「ようやく 帰ることができて、昨晚は母と一緒に過ごすことができました。遠方に住んでいるので葬儀に帰ることもできず…ありがとうございますの一言も言えず…何の恩返しもできませんでした」と涙ながらに話されました。

私はこうお伝えしました。「今日の法要で一生懸命お勤めされている姿は、お母様の姿そのものでした。感謝の気持ちは届いていると思います。日々ご両親に教わったことや、その生きる姿から学んだことを生かしながら、お子様を育てお孫さんに接していらっしゃるのではないのでしょうか。そのことで十分に恩返しをされていると思います。ご家族が健やかに過ごされるのが、何よりの恩返しになるのではないのでしょうか」と。

お釈迦様の御教えを、歴代のお祖師様方が脈々と伝えてくださったお陰で、私たちは尊い御教えという恩恵を受けることが出来ます。命も同じように、それぞれの先祖様が繋いでくださったお陰で、今私たちは存在しています。私たちはそのことに感謝しながら日々を丁寧に生活し、また次の世代へ「命」を、「教え」を伝えていくことが何よりの「報恩」の行いになるのではないのでしょうか。